



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



聖アウグスティヌスの「創世記逐語解」について：  
「神国論」における「神の国」と「地の国」の原型  
の形成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大出, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3211">http://hdl.handle.net/10258/3211</a>

聖アウグスティーンスの『創世記逐語解』について  
——『神国論』における「神の国」と「地の国」の原型の形成——

大 出 哲

De Genesi ad Litteram S. Augustini  
—De formatione exemplorum Civitatis Dei et Civitatis  
terrenae in opere ejus, DE CIVITATE DEI—

Satoshi Ôide

**Epitome**

In caelo formatae sunt duae societates: societas scilicet bonorum angelorum et societas malorum angelorum. Quae, societatem in hoc mundo dividendo, efficiunt corpus Christi mysticum et corpus diaboli mysticum: societatem scilicet spiritualement, quae, gratiam accipiendo, sequitur Christum, et eam, quae, gratiam negando, sequitur diabolum. Quas inter duas societates videtur proelium incessabile. Sed hoc proelium procedit ad unum certissimum finem, id est, discretionem duarum societatum perfectam in iudicio novissimo. Haec est epitome operis Augustini, DE CIVITATE DEI.

Fons, a quo Augustinus deduxit hanc duarum societatum discretionem, est Caput Primum Libri Genesis. Quod bene tradit nobis opus ejus, DE GENESI AD LITTERAM. Creatura spiritualis, quae significatur nomine «caelum» (Gen. I, 1), erat instabilis et tenebrosa ante vocationem Dei. Quam conditionem fluitantem significat nomen «aquae» (Gen. I, 2). Talem creaturam spiritualement vocat Deus ad se, dicendo «Fiat lux». Accepta hac vocatione, alii angeli, quorum voluntas stabilitur ad Deum, fiunt sancti angeli; negata autem hac vocatione, alii angeli ab eo quod accepturi erant cadunt et fiunt immundi angeli. Illorum societas est exemplum Civitatis Dei, horum autem societas est exemplum Civitatis terrenae.

は し が き

天上に二つの勢力が形成された。善い天使たちの集団と悪い天使たちの集団とである。それらは、地上の勢力を二分し、キリストの神秘体と悪魔の神秘体とを現出させる。恩寵を受け容れることによってキリストに属する霊的な集団と、恩寵を拒否することによって悪魔に属する霊的な集団とである。これら二つの神秘体の間には、絶え間のない争いが展開される。だがそれは、一つの確かな目的に向かって絶えず進行している。それは、最後の審判による両勢力の完全な分離である。キリストの神秘体の構成員はすべて天上に凱旋し、悪魔の神秘体の構成員はその呪われた自己分裂によって永遠に苦しむことになる。これが、アウグスティーンスの『神国論』における歴史観の大略である。

アウグスティヌスが天上におけるこれら二つの勢力の分裂を引き出してきた源は、『創世記』の首章であった。かれの『創世記逐語解』(De Genesi ad Litteram) は、その消息を詳かに伝える。現代の聖書解釈からすれば荒唐無稽にさえ思われるかれの創世記解釈も、『神国論』(De Civitate Dei) との関聯において見直されるとき、新たな精彩をおびてくる。

### (一) 矛盾しあうかに見える聖書諸句の整合的な解釈

『創世記』を字義的に解釈するにあたって、アウグスティヌスが遭遇した最初の問題は、『創世記』第1章1節から第2章2節にいたる6日間の創造のわざと、『集会書』の「永遠に生きるものが、万物を同時に造られた。」(Qui vivit in aeternum, creavit omnia simul.<sup>1)</sup> Eccli. XVIII, 1) とをどのように整合的に解釈するか、さらにこの解釈に、『創世記』の「神は、なされていたそのわざを6日目<sup>2)</sup>に完成された。そして、神は、なされていたそのすべてのわざから7日目に休まれた。」(Et consummavit Deus in die sexto opera sua quae fecit: et requievit Deus in die septimo ab omnibus operibus suis quae fecit.<sup>3)</sup> Gen. II, 2) と、『ヨハネによる福音書』の「わたしの父はいまにいたるまで働いておられるのだから、わたしも働く。」(Pater meus usque nunc operatur, et ego operor.<sup>4)</sup> Joan. V, 17) とをどのように一致させるか、であった。一見矛盾しあうかに見えるこれらの諸句は、聖書の無誤謬・無矛盾性を確信するアウグスティヌスの心眼を釘付けにし、『創世記逐語解』全巻のうち、第1巻から第7巻までのほとんどすべてを占める多彩な議論を展開させる。

「真実で真理であるあなたが聖書を世に出された。<sup>5)</sup>」とかれは言う。聖書のほんとうの著者、聖書の第一次的な著者(auctor principalis)は聖霊である。一な真理の霊が道具的な原因(causae instrumentales)である「人間を介して人間の仕方でも語る」(per hominem more hominum loquitur<sup>6)</sup>)のであるから、聖書には誤謬がありえない。したがって、聖書相互の間には矛盾がありえないのである。

「わたしはあなたの愛に告白します、すでに正典とよばれている聖書だけに、それらの著者のうちのだれひとりとして記述のさいにどんな誤謬もおかさなかった、と確信するこの畏敬を表明することを学びました、と。だから、これらの書物のなかで何か真理と矛盾するように思われるものに出会う場合には、写本が誤っているか、翻訳者が意味をとりちがえていたのか、あるいは、わたしが少しも意味を理解していなかったかのいずれかにほかならない、と信じて疑いません。<sup>7)</sup>」

「じっさい、万物は記述されている前後6日を通じて(per sex dies)、そしてまた同時に(simul)創造されたのである、なぜならば、記述されている日数によって神のわざを語っているこの聖書(『創世記』)と、神は万物を同時に創造したと言うあの聖書(『集会書』)とは、それぞれ真であり、また一な真理の霊の神感によって書かれたものであるから、両方ともに一な聖書である。<sup>8)</sup>」

このように聖書の無誤謬・無矛盾性を確信するアウグスティヌスの精神は、「同時に」(simul) なされた創造と「6日を通じて」(per sex dies) なされた創造という矛盾しあう聖書の記述を前にして、解決の道をどこに求めたのであろうか。かれは、創造の瞬間における天使と神との間の非時間的な語らいのうちに解決の道を見出す。

「神があの日(天使)を創造されたとき、天使たちを時間的な広がりによって変化させることなく、原因的にかれらの認識を秩序づけることによって、万物を同時に創造し6日間で完成したという仕方、かれが創造した万物をかれらに6度示したのである。<sup>9)</sup>」

非有体的な事物である天使たちも有体的な事物どももすべて一瞬間に創造された。『創世記』の首章における6日を通じてなされた創造の記述は、この瞬間における天使たちと神との間の非時間的な語らいなのである。有体的な事物どもも天使たちが創造されたと同じ瞬間に創造されたとしたものの、それらが同時にいまあるがままに創造されたとするわけにはいかない。動物界の創造においては、動物どもが現実完成された状態にまで達するためには、時間のズレが明らかに認められるのである。

「動物、とくに、死んだ動物の身体から生じる他の動物が、前者が創造されたときに創造された、と言うことは、はなはだしい矛盾である。<sup>10)</sup>」

それゆえ、死んだ動物の身体から生じることになっている動物の或る自然的な力が、あたかも前以て種子をまかれたかのような或る仕方不完全な始源として、前者のなかに含まれていた<sup>11)</sup>として、時間的なズレを保って現実に完成された状態に達する動物どもの創造を、前述のあの一瞬間にまでさかのぼらせる。同様に、時間的なズレを保って出現する有体的な事物どももすべての創造を、前述のあの一瞬間にまでさかのぼらせてこうする。神は天使を創造したと同じ瞬間に世界の構成要素を創造し、これに時間的な経過において発生進展する有体的な被造物すべての「或る隠れた胚種」(occulta quaedam semina)を封じた<sup>12)</sup>と。

このようにして「6日を通じて」(per sex dies)と「同時に」(simul)とを整合的に解釈したアウグスティヌスは、これらのうえに、さらに他の2句の整合的な解釈をおこなう。かれは、「神は、なされていたそのわざを完成された」(consummavit Deus opera sua quae fecit.)を解釈して、神が創造の瞬間に天使を創造するとともに有体的な世界の構成要素を創造し、これに有体的な被造物のすべての類の胚種を封じて、時間的な経過において発生進展する有体的な被造物のすべての類を完全に規定してしまったことである、とする。

「神はまた、万物のすべての類を規定するという意味において、万物を完成された。<sup>13)</sup>」

だが、胚種において原因的に創造された(causaliter conditae)これらの有体的な被造物が時間的な経過において発生進展していくためには、さらに神の力を必要とした。神は創造の瞬間から、「そのとき予め原因的に造ったものをのちに結果的に完成するように働き始めた。」

(inchoavit ut quod hic praefixerat causis, post impleret effectis.<sup>14)</sup>) ののである。したがって、「神は、なされていたそのすべてのわざから休まれた。」(requievit Deus ab omnibus operibus suis quae fecit.) は、神がいつさいの働きを「やめてしまった」(cessavit) ことを意味するのではなく、神が創造の瞬間以後に新しい本性のものを、すなわち、純靈的なあるいは有体的な被造物の新しい類をなにも造らなかったことを意味するのである<sup>15)</sup>。こうして神は、創造の瞬間いらい、胚種的に創造されたすべての有体的な被造物を無に帰らせることなく保存し<sup>16)</sup>、経綸の働きによって導き動かしながら (administratorio actu gubernans et movens<sup>17)</sup>) 発生進展させ、人祖の創造を期としてすべての有体的な被造物を現実の完成態へと導いたのちも、なお保存と経綸 (conservatio et administratio) の働きによって、いまにいたるまで「休みなく」(sine cessatione) 働かれるのである。われわれは、次の引用をもってアウグスティヌスとともに「矛盾しあうかに見える聖書諸句の整合的な解釈」を終えることにする。

「不信なものあるいは不敬虔なものでなければだれもその真実性を疑わない聖書のこれらすべての証拠により、われわれは次のような見解へと導かれた。神は、世の始めから或るもの(天使)をすでに本性そのものにおいて造り、或るものは予め原因を造るという仕方では、第一に万物を同時に創造された (primum simul omnia creavisse), すなわち、全能なものは、現存するものばかりでなく未来において存するであろうものをも造り、それらのなされていたわざから休まれた、だが、それは、ひきつづき経綸と指導によって時間と時間的な事物の秩序さえも創造するため (ut administratione atque regimine crearet etiam ordines temporum et temporalium) であった。すなわち、神は、万物のすべての類を規定するという意味において万物を完成し、さらに、世界を進展させるという意味において万物を始められたのである、したがって、万物を完成したという意味において休まれ、万物を始めたという意味においていまにいたるまで働かれるのである。<sup>18)</sup>」

上に引用された《*primum simul omnia creavisse*》, 《*ut administratione atque regimine crearet etiam ordines temporum et temporalium*》, 『創世記逐語解』VI, 10, n. 17<sup>19)</sup> の《(res) quae secundum causas simul creatas non jam simul sed suo quoque tempore creantur ……》(同時に創造された原因にしたがって同時にではなくおのおのその時期に達したときに創造されるものども……), および、同書V, 11の題<sup>20)</sup>《*Rerum creationem primam factam esse sine temporis mora*》(事物の第一の創造は、時間の広がりなしになされた。)などによれば、アウグスティヌスは、万物を同時に造ったあの瞬間の神の働きにも、あの瞬間に造られた有体的な被造物の胚種を時間的な経過において発生進展させ、人類の創造を期として現実の完成態へと導いた神の働きにも、ともに *creare* (創造する) という動詞を用いており、特に前者を *creatio prima* と明記しているがゆえに、われわれは前者を *creatio prima* (第一の創造), 後者を *creatio secunda* (第二の創造) とよぶことにしよう。これら二つの創造、すなわち、非時間的な第一の創造と時間的な第二の創造との区別を、かれは『創世記』の敘述のうえに読みとる。

「しかし、泉が地からわきでて、つちの面をあまねく潤していた。」(創世記 II, 6) この泉の記述からひきつづき語られていることがらは、すべて同時になされたことではなくて、時間の広がりによってなされたことなのである。<sup>21)</sup>

かれは、『創世記』の首章1節から第2章5節までを第一の創造の敘述、第2章6節から終節までを第二の創造の敘述、第3章以下を人類固有の歴史の敘述であるとする<sup>22)</sup>。

## (二) 三位一体の神とその創造のわざ

創造については、次の三つが特に問われねばならない<sup>23)</sup>。

- (1) だれが被造物を造ったか。
- (2) 何を介して造ったか。
- (3) なぜ造ったか。

第一の問いに対する答えは、「神が」である<sup>24)</sup>。被造物の形成因は、三位一体の神なのである。父と子と聖霊は、それぞれペルソナを異にするが、三つの別々な神ではなくて一つの神であり<sup>25)</sup>、この一つの神が働くとき、おのおののペルソナは同時に不可分離的に働き、子も聖霊もなしえない或ることを父がなし、父も子もなしえない或ることを聖霊がなし、父も聖霊もなしえない或ることを子がなす、ということはまったくありえない<sup>26)</sup>。この「三位一体の不可分離性」(inseparabilitas Trinitatis) について、『ネブリディウス宛の書簡』は、次のような存在論的な証明を与える<sup>27)</sup>。被造物はその存在を三つのペルソナをもつ神から受けたのであるから、被造物の存在は聖三位の足跡をもたなければならない、という前提からこの証明は出発する。存在するということ、このものがあるいはあのものであるということ、存在している当の存在においてできるかぎり持続するということ、これら三つの特性はあらゆる事物に存し、あらゆる事物によって示される。これらのうち第一の特性は、万物がそれに起因して (ex qua) 存在している・かれらの本性の原因を示しており、第二の特性は、万物がそれを介して (per quam) 造られ形成されるみことばの形相 (species Verbi) を、第三の特性は、万物がそれにおいて (in qua) 存在している持続 (manentia) を起させる聖霊の働きを示している。そこで、もしこのものあるいはあのものでもなく、また、その類において存続しているのでもない或るものが存在するようになりうるならば、また、存在もせずその類においてできるかぎり存続もしない或るものがこのものあるいはあのものであるようになりうるならば、さらにまた、存在しもせずこのものでもなくあのものでもない或るものがその類においてその類の力にしたがって存続するようになりうるならば、あの聖三位においても、或るペルソナが他のペルソナを除外して或ることをなしうることになるであろう。だが、存在するものは何であれ、同時にこのものあるいはあのものであり、かつ、その類においてできるかぎり存続しなければならない、ということ洞察するならば、三つのペルソナは個々別々に何事もなしえないことが理解されよう。

このように、三つのペルソナの働きはそれ自体として (per se) 分離されえないものであるが、原罪によって弱められたわれわれの理性は、これらを区別して示す以外には方法をもたない。したがって、われわれは、被造物の存在の原因を第一のペルソナである父に、被造物の原型を第二のペルソナである子に、被造物を存続させる使命 (munus) を第三のペルソナである聖霊に帰着させるのである。

第二の問いに対する答えは、「神は言われた、“成れ”と、そうすると(被造物)が成った。」(Dixit, Fiat, et facta est.) のなかに見出される<sup>29)</sup>。《Dixit, Fiat.》のなかにわれわれは、みことばの生みの親 (Verbi generator) である第一のペルソナと神のみことば (Verbi Dei) である第二のペルソナを見出す<sup>29)</sup>。父である神から生まれ出たこの永遠なみことばのうちには、すべての被造物の原型が、造られた形相としてではなく永遠不可変な形相 (forma aeterna et incommutabilis) として存在しており<sup>30)</sup>、このみことばを介して父である神は世界を創造したのである<sup>31)</sup>。

「水は翹ぶものをいだせよ。」(Educant aquae volatilia<sup>32)</sup>. Gen. I, 20) の「翹ぶもの」と創造された「翹ぶもの」との間には無限なへだたりがある。前者はみことばのうちに存在する永遠不可変なアイデアであり、後者は世界のうちに存在する時間的可変的な存在である。にもかかわらず、両者は父である神が与える存在の紐帯によって結ばれている。おのおのの個物は、神の叡智のうちに永遠な現在として存在する<sup>33)</sup> アイデアとの対応において、生成—存続—消滅の舞台上に登場し、神の叡智の世界計画にしたがって進行する。

第三の問いに対する答えは、『創世記』の首章において繰返されているみわざの確証 (approbatio) 「神は〔それ〕を見てよいとされた。」(Vidit Deus quia bonum est.) のうちに見出される<sup>34)</sup>。この句は、神の知識の変化を意味するものではない。神の知識は、われわれが予見する (prospicere) 未来のもの、われわれが実見する (adspicere) 現在のもの、われわれが懐古する (respicere) 過去のものを「いっしょに」(cum) 永遠な現在において「観る」(tuere) 直観 (contuito) なのである<sup>35)</sup>。神は、被造物がみことばのうちに永遠な現在として存するアイデアにかたどられていることを、すなわち、被造物が下位の善として最高善 (summum bonum) を分有していることを、被造物に対して確証したのである。では、最高善による下位の善の創造は、どのような理由によってなされたのであろうか。「神は、他の善を分有することによってではなく、自分自身の善によって善である。」(Ille bono suo bonus est, non aliunde participato bono.<sup>36)</sup>) 神は、絶対的な善 (bonum simplex) である。それゆえ、被造物の善は、これを増加し変化させることができない<sup>37)</sup>。神は、その内在的な生命において完全に充足し、創造から来るあの外的な光栄、「神の国の壮麗な飾りの輝かしさ」(gloria magnitudinis decoris regni tui<sup>38)</sup>) をいささかも必要としないのである。にもかかわらず世界を創造した所以はどのようなものであろうか。それは、次の句から導き出されるであろう。「あなたは、それらのもの(被造物)を必要と

して造られたのではなく、あなたの善性の充満から造られた。」(quae non ex indigentia fecisti, sed ex plenitudine bonitatis tuae.<sup>39)</sup> 万物の源である神は、自分のあり余る善を、自分以外のものにも分け与えようと欲したのである。これこそ、スコラ哲学の定式「善は自分自身を拡散し、伝達するものである。」(Bonum est diffusivum sui et communicativum.) が示すところのものである。この定式が示すところのものをあの確証 (approbatio) のなかに読みとって、アウグスティヌスは、「なぜ造ったか」の問いに対して次のように答える。すなわち、「その理由は、善である神によって善が創造されたということ以外にはない。」(nec causa melior quam ut bonum crearetur a Deo bono.<sup>40)</sup>——いつそう明らかに書き改めれば、「その理由は、下位の善が神の善の充満から溢れ出たということ以外にはない。」——と。創造の理由は、神の善性の充満以外には求められえないのである。これは、さらに簡潔な表現をとって、『キリスト教の教義』(De Doctrina Christiana) のなかに現われる。「神が善であるがゆえに、われわれは存在するのである。」(quia Deus bonus est, sumus.<sup>41)</sup> がそれである。これは、のちに聖トーマスが『神学大全』のなかで引用するところのものである<sup>42)</sup>。この充満している神の善性は、自分のあり余る善を自分以外のものにも分け与えようと欲する神の愛であり意志である。神は、自分の充満しているところから、「あらゆる強要からまったく自由な意志によって」(voluntate ab omni necessitate libera<sup>43)</sup> 万物を創造したのである。だが、神の意志は盲目的に創造を終えたわけではない。神の外部への働き (operatio ad extra) は、一定の目的を有しなければならない。しかし、絶対的な善である神は、自分以外のものを目的として働くことができない。それゆえ、神は創造のわざにおいて、自分自身を被造物の究極目的として設定したのである。こうして被造物は、神の無尽蔵な善をおのおのそのわけまえに応じてうけ、「神の国の壮麗な飾りの輝かしさ」を織りなすために出現した。創造の第一目的は、じつにこの神の外的な光榮 (gloria externa) にあるのである。だが、神はこの外的な光榮を必要としたのではない。ところで、「どこにおいても、神はそのみわざによって讃美される。」(Undique laudatur Deus ab operibus suis.<sup>44)</sup> )とされている神の外的な光榮である讃美は、どのようにし果されるのであろうか。次の引用がこれに答えるであろう。

「無言な地にも或る声がある、それは地の容姿<sup>すがた</sup>である。地の容姿に注目しなさい、地の豊饒さを見なさい、地の力を見なさい、どのようにして種子をはらみ、どのようにして播かれ<sup>みのり</sup>ない多くのものをもたらすかを。……感歎しながら探し求め、偉大な力、偉大な美、輝かしい果実を見出したとき、地は自分だけでまた自分自身でこの果実を収めえないがゆえに、さらにあなたは次のことに気がつくであろう、すなわち、地はあの創造主によらないで自分自身で存在することはできないということに。あなたが地において見出したこのことは、地の讃美の声であり、あなたが創造主を讃美することをすすめるものなのである。この世の美がすべて考察されるとき、この世の容姿はあたかも一つの声によるようにあなたに答えるではありませんか、“わたしを造ったのは、わたしではなくて神である”と。<sup>45)</sup>」



非理性的な被造物は、神の足跡 (*vestigia Dei*) を理性的な被造物に示すことによって、神のみむねを成就する。理性的な被造物である人間は、非理性的な被造物が示す神の足跡によって創造主である神を認識し、かれに讃美を捧げなければならない。この讃美は、人間が有する神の像 (*imago Dei*) を神に向けることによってまっとうされる。「次に、神は、“われわれの像のようにわれわれに似せて人を造ろう”と言われた。……こうして、神は、人を造られた。神の像のようにそれを造られた。」(Et dixit Deus: Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram.……Et fecit Deus hominem, ad imaginem Dei fecit eum.<sup>46)</sup> Gen. I, 26, 27.) と聖書が告げるように、神は自分の三位一体の像に似せて人間を造った。アウグスティヌスは、*faciamus* の複数が三つのペルソナを示し、*fecit Deus* の単数が三つのペルソナの一性 (*unitas*) を示すとして、ここに三位一体の奥義を読みとるのである<sup>47)</sup>。人間は三位一体の像であって、たんなる三位一体の足跡ではない。朽ち果てる「外面の人」(*homo exterior*<sup>48)</sup>)——この名称のもとに、肉体と感覚的な生命とをとともに理解する<sup>49)</sup>——にも三位一体の類似 (*similitudo*) がある、すなわち、可視的な事物、視覚に生じる視覚像 (*visio*)、対象と視覚とを結びつけ、生じた視覚像を保有する精神の緊張 (*intentio animi*)、これら三つは不可分離的に働いて三位一体の類似を示している<sup>50)</sup>。だが、この類似は最下の有体的な被造物に源を發し、感覚を介して靈魂において生じるものなるがゆえに、有体的な被造物に存する神の足跡 (*vestigia Dei*) の埒外に出るものではない<sup>51)</sup>。しかし、日に日に新たにされる「内面の人」(*homo interior*<sup>52)</sup>) には、「記憶」(*memoria*)、「知」(*intelligentia*)、「愛」(*diligentia*) という三位一体の像が存している。

「精神のこの三一性が神の像であると言われるのは、精神が自分を記憶し、自分を知りかつ愛するという理由によるのではなくして、精神が自分を造られた神を記憶し、知り愛することもできるという理由によるのである。」(*Haec trinitas mentis non propterea Dei est imago, quia sui meminit mens, et intelligit ac diligit se; sed quia potest etiam meminisse, et intelligere, et amare [Deum] a quo facta est.*<sup>53)</sup>)

この「できる」(*potest*) という語に注目しなければならない。人祖の靈魂は、あふれるばかりの恩寵のうちに、神を記憶し、神を知り、神を愛するように造られた、すなわち、神という対象をすでに有している現実態としての三位一体の像、「神の記憶」(*memoria Dei*)、「神の知」(*intelligentia Dei*)、「神の愛」(*diligentia Dei*) として造られたのである。だが、この像はまもなくその対象を自分にすり変え、「自分の記憶」(*memoria sui*)、「自分の知」(*intelligentia sui*)、「自分の愛」(*diligentia sui*) に墮してしまった。すなわち、神を対象としてもつこともできる可能態 (*potentia*) としての神の像に墮してしまっただのである。原罪の烙印をもって生まれるアダムの子孫は、可能態としての神の像を有するにすぎない。人はふたたび、それを神の恩寵の助けによって現実態へとひき戻さなければならない。すなわち、記憶・知・愛を自分から神へと向

けなければならない。このことによって、すなわち、自分の究極目的である神へと向かうことによって、神の讚美はまっとうされ、人は真の幸福にあずかりうるのである。創造の第一目的である神の外的な光榮は、同時に被造物の幸福なのである。

だが、神の讚美という上向きの力には、自己愛という下向きの力がつねに戦いを挑む。

「永遠性がわれわれを天上に向けて喜ばせ、消滅的な善の快樂がわれわれを下界にひきとめるときにも、同じ一つの靈魂は、その半分の意志で前者を、他の半分の意志で後者を欲するようになっている。それゆえ、靈魂ははげしい苦惱によって引き裂かれる。真理にうながされて靈魂は、前者の優越を認めるが、習慣に縛られて後者を断念しない<sup>54)</sup>。」

人の靈魂は、この世における最後の瞬間まで、下向きの力に抗しながら上方の神へと向かわなければならない。この事実の深い体験に基づいて、アウグスティーンスは、『告白』の冒頭において、「あなたはわたしたちをあなたに向けて造られた。わたしたちの心はあなたのうちに休らうまでは安んじることができない<sup>55)</sup>。」と言っている。「不安」こそは、人間の靈魂の特徴である。不安は愛のあるところにだけ存しうる。人間が、愛によってその対象と結ばれながらも対象とともに存しないとき、不安は「苦しみ」(tribulatio) に変わる。アウグスティーンスの靈魂の不安は、「苦しみ」である。

「まだ神とともに存していないこと、誘惑と苦惱のさなかにあつて恐れなしには存しえないこと、これは苦しみ (tribulatio) である<sup>56)</sup>。」

故郷である天上の「神の国」にたどりつき、「顔と顔とを合せて<sup>57)</sup>」神を觀る日まで、人はこの苦しみを続けなければならない。この苦しみの連続は、人の在りかたに「さすらい」(peregrinatio) の性格を与える。「さすらい」こそは、神の啓示を受けた人間の唯一の在りかたである<sup>58)</sup>。「さすらい」のこの苦しみを介してのみ、人はその故郷へ帰りうるのである<sup>59)</sup>。人とその故郷との間に横たわる「さすらい」の場は、満目籬条たる道なき曠野ではない。「わたしは道である。」(Ego sum via. Joan. XIV, 6), 「道はすでにさすらいのひとびとに与えられている。」(Via porrecta est ad peregrinos.<sup>60)</sup> 道ゆく人 (viator) がめいらないように、地の面は豊かな慰めに満ちあふれている<sup>61)</sup>。人は、苦しみながら、慰められながら、永遠の故郷をめざして主の道を歩まなければならない。

Per Tuas semitas	あなたの道によって、
Duc nos quo tendimus,	わたしたちが向かうところ、
Ad lucem quam inhabitas. <sup>62)</sup>	すなわち、あなたが住まれる光へとわたしたちを導かれよ。

こう歌いながら主の道を歩む「小さな群」(pusillus grex<sup>63)</sup>) を、われわれは世界のどこにおいても見出すであろう。

「かしこにおける浄福な<sup>よろこび</sup>歡喜よ、安らかな歡喜よ、不幸をまじえない歡喜よ。歌うことによ

って、あなたの労を慰めなさい、怠惰を愛してはいけない、歌いなさい、そして歩みなさい。」  
 (O felix illic Alleluja! o segura! o sine adversario! Laborem consolare cantando, pigritiam  
 noli amare: canta, et ambula.<sup>64)</sup>)

ヒッポの司教のこの勸告に答える人は、あとをたたない。

### (三) 『創世記』首章 1, 2 節の解釈

第一に問題になるのは、「はじめに」(in principio) の字義 (sensus litteralis) であろう。  
 「はじめに、神は天と地を造られた。」(In principio fecit Deus coelum et terram.) の句が、  
 比喩的な意味以外にどのような意味で語られているかを、すなわち、(a) 時間のはじめに (in  
 principio temporis) という意味で語られているのか、(b) それらがあらゆるものの最初に (pri-  
 mo omnium) 造られたという意味で語られているのか、それとも、(c) 神のひとりご、すなわ  
 ち、みことばであるはじめにという意味で語られているのかを、われわれは究めなければなら  
 ない<sup>65)</sup>。」とアウグスティヌスは『創世記逐語解』の最初で述べているが、同書においてはこの  
 問題を論じていない。それで、『創世記首章 1 節とヨハネ福音書首章 1 節について、マニ教徒を  
 駁する説教<sup>66)</sup>』に主としてその解決を求めることにする。聖書の第一次的な著者 (auctor prin-  
 cipalis) は聖霊であるから、おのおのの聖書の間には矛盾がないということは、すでに述べら  
 れたところである。かれは、この原則のもとにモーセの書、ヨハネ福音書、パウロの書簡を巧  
 みに一致させて、「はじめ」(principium) を「みことば」(Verbum) と解する (c) の立場を導き  
 出す。

ヨハネ福音書の句「もしあなたがたが、わたしがそれであることを信じないならば、あな  
 たがたはあなたがたの罪のうちに死ぬであろう。」(Nisi credideritis quia ego sum, moriemini  
 in peccatis vestris.<sup>67)</sup>) の動詞 sum の主語 ego は「子」(Filius) と解され、補語は『出エジプト  
 記』のあの有名な神に固有な名称「わたしはあ**る**ものである。」(Ego sum qui sum.) が示す唯  
 一の存在自体 (unicum ipsum esse) と解される<sup>68)</sup>。さらに、この存在自体は、ヨハネ福音書の  
 句「あなたはだれですか。〔わたしは〕は**じ**めである。」(Tu quis es? Principium.) によって  
 「はじめ」(principium) と解される<sup>69)</sup>。それで、次の関係が成立する。

子 Filius (みことば Verbum) = 存在自体 ipsum esse = はじめ principium

この関係によって、『創世記』冒頭の《In principio fecit Deus coelum et terram.》(は  
 じめに、神は天と地を造られた。) と『ヨハネ福音書』冒頭の《In principio erat Verbum, et  
 verbum erat apud Deum, et Deus erat Verbum. Hoc erat in principio apud Deum. Omnia  
 per ipsum facta sunt, et sine ipso factum est nihil.》(はじめに**みことば**があった、**みことば**  
 は神とともにあった、**みことば**は神であった。かれは、はじめに神とともにあ**た**った。万物は  
 かれによって**つ**くられた、つくられたものの一つも、かれによらず**つ**くられたものはない。)

とを一致させると次のようになる。《Coelum et terram fecit Deus *in Filio*, *per quem* facta sunt omnia.<sup>769</sup>》(神は天と地を子において造られた、万物はかれ(子)によって造られた。)このさい一致の障害になるものは、前置詞 *in* と *per* との相異であるが、かれは『エフェソ人への書簡』を媒介としてこう解決する。《……ut ostenderet nobis mysterium voluntatis suae secundum bonam voluntatem suam, quam proposuit in illo, in dispositione plenitudinis temporum, instaurare omnia in Christo, quae in coelis sunt, et quae in terris, *in ipso*. Ephes. I, 9, 10》(これは、神が、あらかじめキリストにおいて立てておられた慈悲深いみむねにしたがってそのみむねの奥義をわれわれに示されるためであった、それは、時が満たされるにおよんで、天にあるものと地にあるもののいっさいをキリストにおいてかれ〔一つのかしらである神<sup>770</sup>〕において回復させる〔という奥義〕である。)において、《*in ipso*》を《*per ipsum*》(かれによって)と解することができるように、《*Omnia per ipsum facta sunt.*》は《*Omnia in ipso facta sunt.*》と解され、《*In principio fecit Deus coelum et terram.*》は《*per principium fecit Deus coelum et terram.*》と解されうる、と<sup>771</sup>。このように、*principium* を *Verbum* と解する自分の立場をはっきりと打ち出しておいて、かれはマニ教徒の論駁に向かう。「その可変的な運動によって時間が進むところの被造物が何も存在しないところには、時間はまったく存在しえない<sup>772</sup>。」とするかれにおいては、「あらゆるものの最初に」という (b) の立場は、「時間のはじめに」という (a) の立場のうちに解消してしまう。そこでかれは、「マニ教徒は、《*In principio fecit Deus coelum et terram.*》は神のみことばについて言われたのではない、とおそらく言うであろう<sup>773</sup>。」と自説に対するマニ教徒の反駁を想定し、かれらの説を《*In principio temporis fecit Deus coelum et terram.*》として導入してくる<sup>774</sup>。この説に対するかれの論駁はこうである。《*Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram; et Fecit Deus hominem ad imaginem Dei.*<sup>775</sup> Gen. I, 26, 27》において、《*faciamus*》の複数が三つのペルソナを、《*fecit Deus*》の単数が三つのペルソナの一性を示すことはすでに述べられたところである<sup>776</sup>。それで、《*In principio fecit Deus coelum et terram.*》において、もし最も誠実な最も真な信仰が《*in principio*》を《*in principio temporis*》と受け取るならば、この句においてはたんにペルソナの一性しか見出されないが、もし《*in Filio*》と受け取るならば、たんにペルソナの一性ばかりでなく、第二のペルソナも見出されるのである。最も誠実な最も真な信仰が後者を選ぶのは当然であろう<sup>777</sup>。

第二に、われわれは「天と地」(*coelum et terra*)の字義を探らなければならない。アウグスティヌスは、『告白』第12巻17章および20章<sup>778</sup>において、説明の可能性を二つ提示する、すなわち、「天」は霊的な被造物を「地」は有体的な被造物を意味するか、あるいは、「天と地」が有体的な世界全体を意味する、とする。かれの敬虔は、『告白』において、これらのどちらか一方を決定的なものとすることを避ける。

「だれかが、“モーセはわたしと同じように考えたのだ”と言い、別なだれかが、“いや、わたしと同じようにだ”と言うなら、“両方ともほんとうであるなら、むしろモーセが両方とも同じように考えたのだとなぜ言ってはいけないだろうか”と言うほうがいつそう敬虔であるとわたしは思う。さらにまた、もし第三、第四の、あるいは、まったく別な説明をこれらの言葉のうちに見出して、それらをほんとうだとするひとがあるならば、モーセはそれらのすべてがわかっていた、となぜ信じられないのだろうか。……かれがこれらの言葉を書いたとき、われわれがこれまでに見出すことができたどんな真理をも、われわれがこれまでに見出すことができなかつたどんな真理をも、あるいは、われわれがまだ見出すことはできないが、これからこれらの言葉のなかに見出されうるどんな真理をも、かれはこれらの言葉のなかに確かに気付きかつ考えていたのである<sup>80)</sup>。」

同様に、かれは『創世記逐語解未完の書』(De Genesi ad Litteram Imperfectus Liber)においても、「おそらく」(fortasse)という敬虔な語調ではじめて、「見えない被造物(天使たち)との比較において、見えるものが“地”と言われるとき、前者が“天”という名称でよばれるのは不当でないように思われる<sup>81)</sup>。」と述べている。しかし、これら二著以後の『創世記逐語解<sup>82)</sup>』においては、「天」を靈的な被造物、「地」を有体的な被造物とする解釈が優位を占めてくる。「造られたあの光は何であるか。靈的なものであろうか、有体的なものであろうか。もしじっさいに靈的なものであるならば、あの光は、“はじめに、神は天と地を造られた。”と言われたとき最初に“天”とよばれたものが、“光が成れ”とのみことばによってまったく完成されてできた最初の被造物でありうる、すなわち“神は言われた、‘光が成れ’と、そうすると、光が成った”の句は、創造主が“天”とよばれたものを自分のもとによびよせたので、あのものの向きが変えられ、照明を受けたと解されうる<sup>83)</sup>。」の条件文が、「最初に造られたあの光は靈的な被造物の形成である。」(illam lucem quae primitus facta est, conformationem esse creaturae spiritualis.<sup>84)</sup>)によって肯定されるとき、結題は、あの「天」が靈的な被造物であり、神の叡智の照明に浴する以前には不安定な暗黒の状態にあったことを明らかに提示する。

第三に、われわれは、「だが、地は見えず、<sup>かたち</sup>定形なく、闇は深淵の上にあった、そして、神の靈は水の上をおおい動いていた。」(Terra autem erat invisibilis et incomposita, et tenebrae erant super abyssum: et Spiritus Dei superferebatur super aquas.<sup>85)</sup>)の字義を明らかにしよう。聖書記者は、「天」という語によって示される靈的な被造物が、神の照明に浴する以前には不安定な暗黒の状態にあったこと、および、「地」という語によって示される有体的な被造物が、神のみことばによって形態を与えられる以前には混沌とした無形態な質料であったこと、これらのことを示す必要があった。それゆえ、「あの無形態性が無知なひとびとにもわかりやすく示されるように」(ad illam informitatem, ut tardioribus poterat insinuandam<sup>86)</sup>)、「地」と「水」という他のものにくらべて職人の手によって容易に扱われうる二つのものの名称を使用し<sup>87)</sup>、まず、「地は見えず、<sup>かたち</sup>定形なく、闇は深淵の上にあった。」と言って有体的な質料の混沌

とした無形態性を示し、次に、「水」という語によって——「水は地よりも動きやすいものであるから」(aqua enim mobilior est quam terra.<sup>88</sup>)——有体的な質料の無形態性ととも靈的な被造物の流動的な状態を示したのである<sup>89</sup>。「水」という名称によってその状態を示されたこれらのもの、すなわち、無形態な有体的な質料と流動的な靈的な被造物とは、「成れ」というみことばによって形成され完成されるべく創造主の善い意志のもとにおかれていた。これが「神の靈は水の上をおおい動いていた。」の字義である<sup>90</sup>。この神の靈は、第二の創造において有体的な被造物の胚種を完全な現実的な存在に到達させたのちにおいても、保存と経綸の卓越した能力によってなおも被造物の上にとどまり<sup>91</sup>、それを創造の終局目的に向かって導いていくのである。

さて、「水」という語によって示されるものの一方は、「成れ」というみことばによって叡智の照明に浴して「光」となり、他の一方は形相を受け取って有体的な被造物の胚種となるのであるから、「水」という語によって示されるものが「光」と胚種とに先立つことは明らかである。だが、それは時間によって先立つのではない。というのは、時間の広がりなしになされた第一の創造の敘述——『創世記』の首章1節から第2章5節まで——のうちに時間のズレを認めることは許されないからである。では、この先立性(prioritas)はどのようなものであろうか。かれは、次のような起源の先立性(prioritas originis)であると言う<sup>92</sup>。話す人は、時間的により先に無形態な音声を発して後にそれを集めて言葉に形成するのではなく、同時に「形成された質料」(formata materia)としての言葉を発する。このさい「或る起源による」(quadam origine)先立性が音声に賦与されなければならない<sup>93</sup>。これと同様に、すべてが同時に造られた第一の創造においても、「水」という語によって示されたものに、起源による先立性を賦与しなければならない。この起源の先立性によって、「聖書は、神が創造の時間によって分けなかったことを、言表の時間によって分けえた」(potuit dividere Scriptura loquendi temporibus, quod Deus faciendi temporibus non divisit.<sup>94</sup>)のである。

一瞬間のできごとを、聖書は6日間に完成されたと語る。このさい「6」が選ばれたのは、「6」が完全数であり、この完全数によって創造のわざの完全性が示されるためであった<sup>95</sup>。かれによれば、或る数がその何分の1かに当る部分に分けられ、その各部分が合計された場合にちょうどもとの数になるならば、その数は完全数(numerus perfectus)である。このような条件を満足する数として「6」「28」その他が挙げられるであろうが<sup>96</sup>、「6はこれらのうちの最初の数である。」(horum primus senarius est.<sup>97</sup>)から最も完全な数である。それゆえ、聖書記者は、6の $\frac{1}{6}$ である1、 $\frac{1}{3}$ である2、 $\frac{1}{2}$ である3にそれぞれ創造のわざを割りふって、次のように敘述を進めたのである。

最初の1日： 光の創造。

次の2日間： 世界の上位の部分であるおおぞら堅穹(fimamentum)の創造。

世界の低位の部分である海と地、および、のちにこの部分に棲む動物に与えられるための植物の創造。

残りの3日間： 堅穹にある光るものの創造。

水に棲む動物の創造。

地に棲む動物および人間の創造<sup>99)</sup>。

#### (四) 『創世記』首章 3~5 節の解釈——天使の創造と天使の墮落

アウグスティヌスは、6日間の創造の敘述様式から、「光」(lux)が天使であることを導き出す。まず、創造に関する聖書の敘述様式に眼を向けよう。

- 1日目の敘述： Dixit Deus, Fiat lux; et facta est lux.<sup>99)</sup> (神は言われた、「光が成れ」と、そうすると、光が成った。)
- 2日目の敘述： Dixit Deus, Fiat firmamentum ……: *et sic est factum.* Et fecit Deus firmamentum ……<sup>100)</sup> (神は言われた、「堅穹が成れ」と、そうすると、そのようになった。神は堅穹を造られた。)
- 3日目の敘述： Dixit Deus, Congregetur aqua …… et appareat arida. *Et factum est sic; et congregata est aqua …… et apparuit arida.*<sup>101)</sup> (神は言われた、「水が一つところに集まって、乾いたところがあらわれよ」と。そうすると、そのようになった。水が一つところに集まって、乾いたところがあらわれた。)
- Dixit Deus, Germinet terra herbam pabuli …… *Et factum est sic.* Et produxit terra herbam pabuli.<sup>102)</sup> (神は言われた、「地は青草を生み出せよ。」と。そうすると、そのようになった。地は青草を生み出した。)
- 4日目の敘述： Dixit Deus, Fiant luminaria …… *Et factum est sic.* Et fecit Deus duo luminaria magna ……<sup>103)</sup> (神は言われた、「光るものが成れ」と。そうすると、そのようになった。神は二つの大きな光るものを造られた。)
- 5日目の敘述： Dixit Deus, Educant aquae reptilia animarum vivarum …… *Et factum est sic.* Et fecit Deus …… omne animal reptilium ……<sup>104)</sup> (神は言われた、「水はうごめく生物を生み出せよ」と。そうすると、そのようになった。神はすべてのうごめく生物を造られた。)
- 6日目の敘述： Dixit Deus, Educat terra …… bestias terrae …… *Et factum est sic.* Et fecit Deus bestias terrae ……<sup>105)</sup> (神は言われた、「地は野のけだものをいだせよ」と。そうすると、そのようになった。神は野のけだものを造られた。)
- Dixit Deus, Faciamus hominem …… Et fecit Deus hominem ……<sup>106)</sup> (神は言われた、「われわれは人間を造ろう」と。神は人間を造られた。)

これらの敘述様式において気がつくことは、2日以後の敘述は——人間の創造を除いて——三つの部分、すなわち、《Dixit Deus, Fiat》《Et factum est sic.》《Et fecit Deus ……》から成

り立っているが、「光」の創造の敘述は、上の第二の部分を除く二つの部分から成り立っているということである。かれは、この相異をこう説明する。「光」と人間を除く被造物の創造の敘述における第一の部分《Fiat ……》は、被造物が最初にみことばのうちに生み出され、「創造さるべき被造物の根拠」(ratio condendae creaturae)として存在していたことを示し、第二の部分《Et factum est sic.》は、みことばのうちに存在していた「創造さるべき被造物の根拠」が靈的知性的な存在者によって認識されたことを示し、第三の部分《Et fecit Deus ……》は、被造物が固有の類において創造されたことを示している<sup>107)</sup>。「光」の創造において上の第二の部分《Et factum est sic.》が欠けているのは、「光」が靈的知性的な存在者であり、自分の形成を (conformationem suam) 自分の形成そのものにおいて (in ipsa sua conformatione) 認識しえたからである<sup>108)</sup>。《Fiat lux.》は、「光」がみことばのうちに生み出され、みことばのうちに永遠のイデアとして存在していることを示すとともに、「水」という名称によって示された・流動的な状態に造られた靈的な被造物が創造主によってかれの方へと呼ばれ、かれの叡智の照明に浴して確固とした真理に踏みとどまる靈的な被造物となる<sup>109)</sup>ことを示す。流動的な状態 (conditio fluitans) から固定的な状態 (conditio stabilis) へのこの移行において、靈的な被造物は自分の形成 (conformatio sua) を、すなわち、自分の自由意志の選択を認識していた。もともと「光」と「闇」とは等しく善い本性に造られ、等しく流動的な状態におかれていた、すなわち、等しく神に向かうべき靈的な存在者として造られ、同じ恩寵のもとに同じ知性によって等しく創造主の意志を理解し、創造主の方へと「転向しうる」(convertere potest)と同様に創造主から「離叛しうる」(avertere potest)状態におかれていた。しかし、創造主によって創造主自身の方へ呼ばれたとき、両者とも等しく創造主の意志を理解していにもかかわらず、また、両者とも等しく創造主の意志にしたがって創造主の方へと転向しえたにもかかわらず、一方は、自由意志 (liberum arbitrium) によって創造主の方へと転向することを選び、他方は、自由意志によって創造主から離叛し去ることを選んだのである。流動的な状態にあるところの・本性において最も優れた靈的な存在者の自由意志は、この選択にしたがって創造主による意志の固定を受け、その功罪に応じて創造主による賞罰を受けねばならなかった。《facta est lux》(光が成った)の句は、創造主の方へと転向することを選んだあの流動的な状態にある靈的な被造物が、その意志が永遠に創造主に向かって固定された結果、「光」すなわち聖な天使 (sancti Angeli) となったことを示し、「神はその光を見てよいとされた」(Vidit Deus lucem quia bona est.<sup>110)</sup>)という神の確証 (approbatio) は、「光」だけが創造主の気に入る<sup>111)</sup>、その従順の褒賞として「かれらが未来においてけっして墮落しないということについての最も確実な真理を知りえた。」(eam (veritatem) de suo casu nunquam futuro certissimam scire meruerunt.<sup>112)</sup>)ことを示す。この確証の瞬間から、聖な天使たちは、神という不動な善をなんらの不快をまじえないで楽しみはじめ、かれらがあの不動な善のうちに永遠にとどまらうことを確信しはじ



めたのである<sup>113)</sup>。すなわち、この瞬間に、「聖な天使には、かれらの永遠な幸福の確実な知識が歩みよった」(sanctis Angelis certa scientia suae sempiternae felicitatis accesserit.<sup>114)</sup>)のである。これに反して、創造主から離叛し去ることを選んだあの霊的な被造物は、その意志が永遠に創造主から離叛する方向に固定された結果、「闇」(tenebrae)すなわち穢れた天使(immundi Angeli)となり、あの確証から除外されてしまったのである<sup>115)</sup>。穢れた天使は、創造主の善性を回避しえたが、かれの裁きを回避しえず、不従順の罰として永遠の悲惨へと落されたのである<sup>116)</sup>。Corruptio optimi pessima。(最善なものの壊敗は最悪である。)被造物のうちで最も善な最も優れた存在として造られた天使の一群は、自分の罪によって(vitio proprio)、その優れた本性をそのまま保持しながら、その高い座から落され、永遠な暗黒(sempiternae tenebrae)のうちに、すなわち、恩寵から永遠に遮断された状態に置かれたのである。ここにおいて、聖な天使の群と穢れた天使の群とははっきりと分離され、「神の国」(civitas Dei)と「地の国」(civitas terrena)の両勢力の原型として対峙する。「こうして神は光と闇とを分けられた、そして、神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。」(Et divisit Deus inter lucem et tenebras; et vocavit Deus lucem diem, et tenebras vocavit noctem.)はこのことを示している<sup>117)</sup>。これらの両勢力は、ふたたび架橋されえない距離に引き離され、遮断されてしまった。

「どのような新しい悪魔も善い天使たちからふたたび生じえない、と同様に、どのような悪魔も善い天使たちの集団にふたたび帰れない、ということを知らないカトリック的キリスト教者がだれかいるであろうか<sup>118)</sup>。」

「悪魔は、われわれが聖な天使と呼び、かつ、聖な天上の<sup>すまい</sup>住居に住む理性的な被造物として座天使(Sedes)、権天使(Dominationes)、主天使(Principatus)、能天使(Potestates)の名称を与えている善い神々に親しく交わることはけっしてできない。悪徳が善徳から、また、悪が善から遠くへだたるほど、かれらは心の情感によって(animi affectione)善い神々から遠くへだたっているのである<sup>119)</sup>。」

では天使の群の一部をこのような悪い状態にいらせた原因は何であろうか。上の敘述を導きとして、天使の墮落の問題をさらに深く追求しよう。

第一に、天使の墮落の causa efficiens (作動因)を神に求めることができるであろうか。「光」と「闇」、すなわち、天使と悪魔は、その分離の以前においては、みことばによって等しく「水」という名称によって示される流動的な状態に造られていた。この流動的な状態は、霊的な存在者が悪な存在であることを意味するものではない。

「神の創造によって善な悪魔。」(diabolus institutione Dei bonus<sup>120)</sup>)

「悪魔は、悪魔である以前には天使であったのであり、善なものであったのである。」(diabolus antequam esset diabolus, angelus fuit et bonus fuit.<sup>121)</sup>)

この引用によれば、霊的な被造物は、その流動性にもかかわらず、善な存在として「最も

優れて存在するもの」(id quod summe est) を楽しみ<sup>122)</sup>、「卓絶した真理」(sublimis veritas) を楽しんでいたのである<sup>123)</sup>。天使から最下の本性にいたるまで、すべての本性は神によって善なものとして創造された<sup>124)</sup>。自分自身を拡散し伝達せずにはいられない神の善性の充満からその存在を受けた被造物は、悪であるはずがない。神は善の創造者であり、悪の創造者ではありえない。したがって、天使の墮落という悪の causa efficiens を神に求めることは許されないのである。

第二に、天使の墮落の causa efficiens を天使の意志自体に求めることができるであろうか。

この問題の解決のために、天使の意志が「どのようなもの」(quale) として造られたかをまず考察しなければならない。天使は、流動的な状態、すなわち、創造主の方へと転向しうると同様に、創造主から離叛しうる状態におかれていた、という上の敘述は、アウグスティヌスが、天使の意志は善悪いずれでもない中立的なものに造られていたと解していた、という印象を与えるにちがいない。だが、この印象は次の引用によって破られるであろう。

「善い意志を有しない天使は、悪い天使以外のなにものであったというのか<sup>125)</sup>。」

「意志が善でもなく悪でもないような或る中間にありうるならば、それはほんとうに奇怪なことである<sup>126)</sup>。」

このように善と悪との中間が許されないならば、天使の意志は善に造られたか悪に造られたかのどちらかである。だが、上述のように、神は悪の創造者ではありえない。したがって、天使の意志は、その流動性にもかかわらず、善なものとして造られたのである。では、天使の流動的な意志の善性とは、どのような意味内容をもつものなのであろうか。このことを考察するために、われわれは、聖トーマスが「天使は恩寵の状態に造られたかどうか」(Utrum angeli sint creati in gratia.) という問いに答えるために引用した『神国論』の個所と、それに関連のある少し前の個所を手がかりとしよう。

Bonam voluntatem quis fecerat, nisi ille qui eos cum bona voluntate, id est cum amore casto, quo illi adhaerent, creavit, simul eis, et condens naturam, et largiens gratiam?<sup>127)</sup>  
(天使たちを善い意志すなわち潔い愛を有するものとして創造し、それによってかれらを自分にすがりつくようにさせたもの以外のだれが、[かれらの] 善い意志を造ったのであろうか、かれらに本性を造り与え、恩寵を与えることを同時にしながら。)

Et cum id egit eorum voluntas bona, ut non ad se ipsos, qui minus erant, sed ad illum qui summe est, converterentur, eique adhaerentes magis essent, ejusque participatione sapienter beateque viverent; quid aliud ostenditur, nisi voluntatem quamlibet bonam inopem fuisse in solo desiderio remansuram, nisi ille qui bonam naturam ex nihilo sui capacem fecerat, ex se ipso faceret implendo meliorem, prius faciens excitando avidiorem?<sup>128)</sup> (天使

たちが、下位の存在者であるかれら自身へと転向せずに最高の存在者であるものへと転向し、かれにすがりついてより善い存在者となり、かれに参与することによって叡智的にかつ幸福に生きる、ということをかれの善い意志がなしとげたとき、次のこと以外の何が意味されるであろうか、すなわち、善い本性を無から創造して自分に参与する能力をもつものとさせたものが、まずもって善い意志を触発していっそうかれを望み求めるものとし、次にかれ自身で善い意志を満たしていっそう善いものとしたのでなければ、どんな善い意志といえども無能力なものとしてたんなる望みにとどまり続けたであろう、ということ。)

両方の引用文に印した直線の下線部、および、波線の下線部は、それぞれ内容的に対応する。そこで、両方の引用文の下線部をそれぞれまとめてみる。

(1) 直線の下線部の内容： 神は天使の本性を知性と意志とを有する霊的な存在者として無から創造し、これに原始の恩寵を与えてかれに参与する能力をもつ善い本性にした。

(2) 波線の下線部の内容： 神はまずもってかれらの善い意志を触発してよりいっそうかれを望み求めるものとし、次にかれらの意志をより多くの恩寵で満たしてよりいっそう善いものとし、かれにすがりついて離れないようにかれの意志を固定した。こうして、ついにかれらには、永遠な幸福の確実な知識が歩みよった。

(1) が流動的な意志をもつ天使の状態であり、(2) が固定された意志をもつ天使の状態である。

(1) の状態における天使たちの意志は、「無能力」と言われうるほど弱かった。というのは、かれらは、より多くの「神意にかなわせる恩寵」(*gratia gratum faciens*)を受けなければ、たとえ欲したとしても永遠な幸福に到達しえなかったからである。より多くの恩寵を受けうるか否かは、意志が「原始の恩寵」(*gratia originalis*)によって最初に向けられた方向に、すなわち、神に向かってとどまり続けるか否かにかかっていた。もし意志が最初に向けられた方向にとどまり続けるならば、より多くの恩寵を受けて永遠な幸福へと移行するのである。こうした過程は、天使が最初に置かれた流動性そのものが善に秩序づけられていることを意味するのである。天使の流動的な意志が神に向かうこうした定位が、天使の流動的な意志の善性なのである。

そこでいよいよ、「天使の墮落の *causa efficiens* を天使の意志自体に求めることができるであろうか。」という問いに答えることにしよう。もう一度すぐ前の引用に眼を向けよう。天使の意志を触発していっそう神を望み求めるものとし、天使の善い意志をより多くの恩寵で満たすものは神なのであって、天使自身ではない。天使により多くの恩寵を与える神こそ、天使の永遠な幸福の *causa efficiens* である。原始の恩寵によって神に向けられた意志の状態の持続は、*causa efficiens* が働きかける *conditio sine qua non* (必須的な条件) にすぎないのである。だが、原始の恩寵の状態を持続するためには、かれらは多くの努力をしなければならなかった。

この理由は、天使の意志が無から創造されたことから導き出される。神だけが不可変的な善であり、すべての被造物は、かれによって無から創造されたがゆえに可変的な善である<sup>129)</sup>。この可変性は、被造物の善が欠如に向かつてつねにおびやかされていることを意味する。すべての被造物の存在は、その善を保有する力とそれを欠如させる力との対立抗争として把握される。天使の本性も、無から創造されたがゆえに可変的な善であり、それゆえにまた、そのうちには善を保有する力とそれを欠如させる力との対立抗争がみられるのである。善を保有する力は、「神への愛」(amor Dei), すなわち、神の意志に対する従順となってあらわれ、善を欠如させる力は、「自分への愛」(amor sui), すなわち、自分自身が神のようになって独立不羈の存在になるとする傲慢となってあらわれる。われわれが自分の意志の分裂抗争を知るように、天使もまたその優れた知性によってそれを知り、「自分への愛」に抗して神の意志に従うか、「神への愛」に抗して自分の傲慢に従うか、これらのいずれかに去就を決しなければならなかった。「光が成れ」と永遠なみことばはかれらをかれの叡智へと呼び出す。かれらの意志が自分に与えられた自由選択の権能をどのように使用すべきかは、すでに示されているのである。神の示しに従ってなされる選択は自由意志の善用 (bene uti) であり、神の示しに反してなされる選択は自由意志の悪用 (male uti) である。自由意志を善用して神の意志に従うことを選んだ天使たちの群は、すなわち、あの *conditio sine qua non* を保有し続けて善い意志にとどまった天使たちの群<sup>130)</sup> は、その報賞として、永遠な幸福の *causa efficiens* である神からより多くの恩寵を受けて永遠な幸福へと移行し、ふたたび自分に転向しえないように神に向かつて固定されたのである。他方、自由意志を悪用して自分の傲慢に従うことを選んだ天使たちの群は、悪用という「悪いわざ」(vitium) によって自分の善い本性を傷付け、自分の意志の善性をすべて自分で奪い去ってしまった<sup>131)</sup>。その結果、かれらは、「受けるはずになっていたもの(永遠な幸福)から転落し」(ab eo quod accepturus erat cecidit.<sup>132)</sup>)、永遠に神から離叛し去って、ふたたび神に転向しえないほど悪化してしまったのである。

このように、天使の墮落は、かれらの本性の可変性から導き出される。かれらの本性の可変性以外には、その原因は求められえない。この原因は、可変的な善の内部において、善を保有しようとする力に対立して善を欠如させようとする。それゆえ、かれはこの原因を *causa deficiens* (欠陥因) と名づける。自由意志の悪用は、*causa deficiens* の抑止の撤去である。このことによって、可変的な善は自分の内部から崩壊し去る。可変的な善は、その可変性のゆえに存在の *causa efficiens* を存在自体に求め、同じ可変性のゆえに自己崩壊の *causa deficiens* を自分のうちに蔵する。だが、可変性そのものはただちに悪を意味しない。可変性は、神の正義がかれから生まれたみことばから被造物を区別するために後者に与えた本質的な制限 (*restrictio essentialis*) なのであって<sup>133)</sup>、これなしには被造物は創造されえなかったのである。さらにその可変性にもかかわらず、被造物はその存在を最高善から受けたということによって、存在する

かぎり善である<sup>134)</sup>。諸事物の悪の原因がその可変性であること、および、その可変性にもかかわらず諸事物が善であることを、アウグスティヌスは、次のように簡潔に論じている。

「諸事物はなぜ欠壊していくのか。それは、諸事物が変化するからである。なぜ諸事物は変化するのであるか。それは、諸事物が最も優れた仕方では存在しないからである。なぜ諸事物は最も優れた仕方では存在しないのか。それは、諸事物がそれらを造ったものよりも下位のものであるからである。諸事物を造ったものはだれなのか。それは、最も優れた仕方では存在するところのものである。最も優れた仕方では存在するところのものとはだれなのか。それは神すなわち不可変的な三位一体である、というのは、かれはその最高の叡智によって諸事物を造り、最高の寵愛によってそれらを保存するからである。では、なぜ神は諸事物を造ったのであるか。それは、諸事物を存在させるためである。というのは、最高の存在は最高の善であるがゆえに、どんなにわずかな存在であろうと、存在すること自体は善であるからである<sup>135)</sup>。」

次に、自由意志の悪用という「悪いわざ」(vitium)によって、天使の本性がどのような傷害を受けたかを考察しよう。

「すべての悪いわざは本性を害する。」(Omne vitium naturae nocet.<sup>136)</sup>「悪いわざが存在していて〔本性を〕害さないということはありません。」(Esse vitium, et non nocere, non potest<sup>137)</sup>)自由意志の悪用という悪いわざは、神に向かっていった。

「わたしは天にのぼろう、わたしの玉座を天の星のうえにあげよう、北のはてにある高い山をこえてきわ立ってそびえる山のうえにすわろう、雲のうえにのぼろう、至高者いとたかきものに似たものになろう<sup>138)</sup>。」

あの悪いわざは、至高者の位を奪い、その本性を傷つけようとしたのである。だが、それは空しく終わった。あの悪いわざは、至高者の不可変的不壊敗的な本性 (immutabilis incorruptibilisque natura) につき当たったのである。方向を転じた悪いわざは、その「損傷する力」(potestas laedendi<sup>139)</sup>) を自分の生みの親であるものの可変的壊敗的な本性 (mutabilis corruptibilisque natura) に向けざるをえなくなった。こうして悪いわざは、自分の生みの親である天使の善い本性を傷つけ、「それを悪いものとする」(eam malam facit<sup>140)</sup>) はめに追いこまれたのである。

「それゆえ、神の敵とよばれるものどもがそれによって神に反抗する悪いわざ(vitium)は、神に対する悪ではなくてかれら自身に対する悪なのである。そしてこのことは、悪いわざがかれらにおける本性の善を毀損するということ以外の何ものでもない<sup>141)</sup>。」

本性の善の毀損 (corruptio bonorum naturae) が何を意味するかについてはすでにふれておいたが、天使性の善とよばれるものを規定したうえで、ふたたびより詳細に述べてみよう。

第一に、天使性の善は、天使性そのもの——天使を天使であらしめるところのもの——すなわち、理性的な霊 (spiritus rationales) と定義されるところのものである。

第二に、それは、天使が神から創造のときにいただいた恩寵である。

第二の意味にとられるとき、天使性の善は天使性そのものに付け加えられたものであって、悪いわざによってまったく無くされうるものである。神に向けられた意志の状態は、それが付加的であり可変的であるがゆえに、自由意志の悪用という悪いわざによって害され、自分自身に向かう状態へと反転してしまった。このことは、かれら自身によって恩寵が断ち切られたことを意味する。自分にさからう力が断ち切られたいまとなつては、かれらの意志は自分自身に向かつて暴走し、かれらに用意されていた永遠な幸福から冥府の深淵へと転落する。かれらのうちには、もはや善い意志と悪い意志との抗争はありえない。だが、このことは平和を意味しない。かれらは、「雲のうえ」にのぼろうとする永遠に満たされない欲望に対する絶望と、善い天使の永遠な幸福に対する嫉妬との渦中に呻吟するのである。

第一の意味にとられるとき、天使性の善は、悪いわざによって無くされることもなく、減じられることもない。このことの否定は、天使が天使でなくなることである。神はこのことを欲しなかった。「神は本性の尊厳を絶滅させるほど悪い意志を罰しない」(Deus nunquam ita punit voluntatem malam ut naturae perimat dignitatem.<sup>142)</sup>)のである。このことは神の正義に反しない。なぜなら、かれらは、理性的な霊という形而上学的な地位を確保しながら、そのことによって恩寵の秩序における自分の低い地位を認識し、永遠な悲慘を味わうからである。墮落ののちにおいても第一の意味に解される天使性はどのような変化も受けることなしに存続し、第二の意味に解される天使性の善の欠如を支える。「善はただそれだけで或るところに存在しうるが、悪はただそれだけでどこにも存在しえない」(sola bona alicubi esse possunt, sola mala nusquam.<sup>143)</sup>)のである。永遠に存続する天使性のゆえに、かれらはその優れた知性によって自分の墮落を認識し、永遠な悲慘を味わう。

その存続する天使性のゆえに、かれらは、かれらの下位におかれたすべての可変的な本性の善を、かれらのすぐれた知性と意志とによって害しうる能力を保有している<sup>144)</sup>。だが、このすぐれた能力は、かれらの叛逆の罰として、神による繫縛 (alligatio) を受けてしまった。「悪魔は、最高の能力を有するものによって許されないならば、なにごともしえない。」(diabolus nihil posset, nisi ab illo cujus summa potestas est permitteretur.<sup>145)</sup>)この繫縛によって、かれらの悲慘はさらに増加する。かれは、『黙示録』第20章の悪魔の繫縛を現代に投影する。投影の仕方は、『聖ヨハネの黙示録への解説』(In B. Joannis Apocalypsim expositio)においては、次のように「一千年至福説」(Millenarismus)の色彩を著しくおびている。「一千年」は主の受難にはじまる1,000年とされ、このあいだ悪魔はその能力を行使することを許されない。これに続いて「しばらくのあいだ」(modico tempore)悪魔は解き放され、より強い能力をふるって横暴をきわめる<sup>146)</sup>。しかし、『神国論』においては、「一千年至福説」の影はまったく消え失せている。「一千年」は完全数 (perfectus numerus<sup>147)</sup>)であって、全体を示すために使用されると同時に、「全体によって部分を示す語法」(modus locutionis “a toto pars”<sup>148)</sup>)によって、

部分を示すためにも使用される。前者の場合、「一千年」は、世の始めから世の終わりまでの全時間と解され<sup>149)</sup>、後者の場合、「一千年」は6日間の創造にちなんで分けられた<sup>150)</sup>世界史の六つの期間 (*articuli temporis*)——第1期はアダムからノエの洪水まで、第2期はアブラハムまで、第3期はダビデまで、第4期はバビロン捕囚まで、第5期はキリストの降誕まで、第6期はキリストから世の終わりまで<sup>151)</sup>——の最後の部分<sup>152)</sup>、すなわち、「キリストの最初の来臨から世の終りにいたるまでの全時間」(*totum tempus a primo adventu Christi usque in saeculi finem.*<sup>153)</sup>)と解される。前者の意味に解されるとき、『黙示録』第20章の悪魔の繫縛は、「人間を欺くためにかれが暴力や欺瞞でなしうるあらゆる試みを、自由になすことが許されないということ」(*non permitti exercere totam tentationem, quam potest vel vi vel dolo ad seducandos homines.*<sup>154)</sup>)を意味し、後者の意味に解されるとき、悪魔の繫縛は、教会の設立当初から現代を経て世の終りに至るあいだに、不信仰が信仰の戦勝的な前進によってこうむる敗北を意味する<sup>155)</sup>。善い天使の集団を天上の教会とみるアウグスティヌスにとっては、前者は天上の教会の勝利として、後者は地上の教会の勝利として、両者ともなんらの矛盾もなく並立しうるのである。

天使の墮落についての以上の結論に代えて、アウグスティヌスの死後10年目に教皇位につかれたレオ1世(440~461年在位)が、アストルガの司教トリビウスに宛てた書簡を引用することにする。

「ほんとうのカトリックの信仰は、霊的なあるいは有体的なすべての被造物の本質は善であり、悪い本性は何も存在しないことを告白する。なぜなら、万物の創造主である神は、善いものだけを造られたからである。それゆえ、悪魔でさえも、造られたままにとどまっていたならば善であったのである。しかし、かれは本来的に優れて善な賜を濫用し、“真理に立たなかった”(Joan. VIII, 44)から、たとえ正反対の本質(悪)にまで変化しなかったとはいえ、かれがそれによりすがらねばならなかった最高善(神)から背き離れてしまった。次のような説を主張するものもまた同様に真理から虚偽に陥るものである。そのひとたちは、天使たちが自由意志によって自発的に犯し、自分の自発的な悪のために罰を受ける罪を、本性の責に帰着させるのである。自由に犯し、そのために罰を受けることこそ、かれらにとって悪であろうが、悪そのものは実体ではなく、てかえって、神に背いた実体の罰であろう<sup>156)</sup>。」

神の叡智の照明に浴し、永遠な幸福にあげられた天使たちは、「自分が神の本質でないということ」(*non se esse quod Deus est*)を認識し、次いで、自分が創造されたことを感謝して神の讃美に向かう。このさいのかれらの自己認識が神の讃美に比して劣っているという理由で、前者は「夕」(*vespera*)と、後者は「朝」(*mane*)と名づけられる<sup>157)</sup>。これが、「こうして夕となり朝となって1日がすぎた。」(*Et facta est vespera, et factum est mane dies unus.*<sup>158)</sup>)の字義である。

このようにして、聖な天使たちの讃美によって第1日が閉じられ、次に、神のみことばのうちにおける「創造さるべき有体的な被造物の根拠」(*ratio creandae creaturae corporalis*)

の認識によって第2日が始まるのである<sup>159)</sup>。神は、有体的な被造物を固有の類において (in genere proprio) 創造するに先立ち、「創造さるべき有体的な被造物の根拠」を、穢れた天使たちには示さず、自分の讚美に向かってきた聖な天使たちにだけ示した。

「創造される被造物そのものに先立って、それによって被造物が創造される場所の根拠が神のみことばのうちに存するように、同じ根拠の認識もまた、罪によって闇になっていない知性的な被造物により先に生じるのであり、そののちに被造物のあの創造 (固有の類における創造) が生じるのである<sup>160)</sup>。」

こうして、善い天使たちの集団に秩序づけられ、かれらを介して神の讚美に向かう有体的な被造物の世界が創造されていくのである。

〈注〉

- 1) De Genesi ad litteram, VI, 3, n. 4; ML 34, 340.
- 2) 『ウルガタ訳』では、この箇所は「7日目に」となっているが、『70人訳』では、「6日目に」となっている。  
Vide: De Genesi ad litteram, IV, 2, n. 6; ML 34, 298.  
Idem, IV, 10 n. 20; ML 34, 303.
- 3) De Genesi ad litteram, IV, 1, n. 1; ML 34, 295.
- 4) Idem, IV, 11, n. 21; ML 34, 303.
- 5) Confessiones, XIII, 29, n. 44; ML 32, 864.  
O Domine, nonne ista Scriptura tua vera est, quoniam tu verax et veritas edidisti eam?
- 6) De civitate Dei, XVII, 6, n. 2; ML 41, 537.
- 7) Epistola LXXXII, 1, n. 3; ML 33, 277.
- 8) De Genesi ad litteram, IV, 34, n. 53; ML 34, 319.
- 9) Idem, V, 23, n. 46; ML 34, 338.
- 10) Idem, III, 14, n. 23; ML 34, 289.
- 11) Ibid.
- 12) De Trinitate, III, 8, n. 13; ML 42, 875.  
Omnium rerum quae corporaliter visibiliterque nascuntur, occulta quaedam semina in istis corporeis mundi hujus elementis latent.
- 13) De Genesi ad litteram, VII, 28, n. 42; ML 34, 371.
- 14) Idem, VI, 11, n. 18; ML 34, 347.
- 15) Idem, IV, 12, n. 23; ML 34, 305.
- 16) Idem, V, 20, n. 40; ML 34, 335.
- 17) Idem, V, 23, n. 46; ML 34, 338.
- 18) Idem, VII, 28, n. 42; ML 34, 371-372.
- 19) ML 34, 346.
- 20) ML 34, 330.
- 21) De Genesi ad litteram, V, 11, n. 27; ML 34, 331.
- 22) かれは De Genesi ad litteram, XI, 28, n. 27; ML 34, 331. において、『創世記』III, 1からはじまる蛇の奸計を《ipsum primum factum》(この最初のできごと)と呼んで人類固有の歴史の始点においている。
- 23) De civitate Dei, XI, 21; ML 41, 334.  
tria quaedam maxime scienda de creatura nobis oportuit intimari, quis eam fecerit, per quid



fecerit, quare fecerit: *Deus dixit, inquit, Fiat lux, et facta est lux. Et vidit Deus lucem, quia bona est. Si ergo quaerimus quis fecerit, Deus est. Si per quid fecerit, Dixit, Fiat, et facta est. Si quare fecerit, Quia bona est.*

- 24) Ibid.
- 25) Contra Adimantum Manichaei discipulum, 1; ML 42, 130.
- 26) Epistola XI, n. 2; ML 33, 75.
- 27) Epistola XI, n. 3; ML 33, 76.
- 28) Vide (23).
- 29) De Genesi ad litteram, I, 6, n. 12; ML 34, 251.
- 30) Sermo CXVII, 2, n. 3; ML 38, 662. De libero arbitrio, II, 16, n. 44; ML 32, 1264-1265.
- 31) Contra Secundinum Manichaeum, 3; ML 42, 579.
- 32) De Genesi ad litteram, III, 1, n. 1; ML 34, 279.
- 33) De sermone Domini in monte, II, 3, n. 12; ML 34, 1275.
- 34) Vide (23).
- 35) De civitate Dei, XI, 21; ML 41, 334.
- 36) Enarratio in Psalmum CXXXIV, n. 3; ML 37, 1740.
- 37) Enarratio in Psalmum CXXXIV, n. 4; ML 37, 1740.  
Dominum sine bonis creatis perfectum, non indigum, incommutabilem, nullius bonum quaerentem quo augeatur, nullius malum timentem quo minuatur, invenio.
- 38) Enarratio in Psalmum CXLIV, n. 15; ML 37, 1879.
- 39) Confessiones, XIII, 4, n. 5; ML 32, 846.
- 40) De civitate Dei, XI, 21; ML 41, 334.
- 41) De doctrina christiana, I, 32, n. 35; ML 34, 32.
- 42) S. Thomae Aquinatis Summa Theologiae, I, q. 19, a. 4, obj. 3, ad 3.
- 43) Denz. 1805.
- 44) Enarratio in Psalmum CXXVIII, n. 5; ML 37, 1691.
- 45) Enarratio in Psalmum CXLIV, n. 13; ML 37, 1878-1879.
- 46) De Genesi ad litteram, III, 19, n. 29; ML 34, 291.
- 47) Ibid.; ML 34, 291-292.
- 48) II Cor. IV, 16: De diversis quaestionibus octoginta tribus, LI, n. 1; ML 40, 32.
- 49) De Trinitate XII, 1, n. 1; ML 42, 997. De diversis quaestionibus octoginta tribus, LI, n. 3; ML 40, 33.
- 50) De Trinitate, XI, 2, n. 2; ML 42, 985. Idem. XI, 2, n. 4; ML 42, 987.
- 51) De Trinitate, XI, 5, n. 8; ML 42, 991.
- 52) Vide (48).
- 53) De Trinitate, XIV, 12, n. 15; ML 42, 1048.
- 54) Confessiones, VIII, 10, n. 24; ML 32, 760.
- 55) Idem. I, 1, n. 1; ML 32, 661.
- 56) Enarratio in Psalmum, XLIX, n. 22; ML 36, 579.
- 57) Vulg. I Cor. XIII, 12.
- 58) 中川秀恭: 『ヘブル書研究』序論二, 15頁.
- 59) Enarratio in Psalmum XLIX, n. 22; ML 36, 579.  
Hanc tribulationem peregrinationis suae qui non invenerit, ad patriam redire non cogitat.
- 60) In Epistolam Joannis ad Parthos, tractatus X, n. 1; ML 35, 2054.
- 61) Enarratio in Psalmum XLIX, n. 22; ML 36, 579.  
Ea ipsa in hoc mundo felicitas, affluentia rerum temporalium: non quidem ipsa tribulatio est; solatia sunt nostrae tribulationis.

- 62) カトリック教会聖体讃歌 Panis Angelicus から。
- 63) Vulg. Luc., XII, 32.
- 64) Sermo CCLVI, n. 3; ML 38, 1193.
- 65) De Genesi ad litteram, I, 1, n. 2; ML 34, 247.
- 66) Sermo I; ML 38, 23-26.
- 67) Joan. VIII, 24: In Joannis Evangelium tractatus XXXVIII, n. 10; ML 35, 1681.
- 68) In Joannis Evangelium tractatus XXXIX, n. 8; ML 35, 1685.
- 69) Ibid.
- 70) Sermo I, 2, n. 2; ML 38, 24, 25.
- 71) “in ipso” を「一つのかしらである神において」と訳したのは、『コリント人への前の書簡』III, 22, 23 による。
- 72) Sermo I, 3, n. 3; ML 38, 25.
- 73) De civitate Dei, XII, 15, n. 2; ML 41, 364.  
Ubi nulla creatura est, cujus mutabilibus motibus tempora peragantur, tempora omnino esse non possunt.
- 74) Sermo I, 5, n. 5; ML 38, 25.
- 75) Ibid.
- 76) Ibid.
- 77) 注47)の本文を参照。
- 78) Sermo I, 5, n. 5; ML 38, 26.
- 79) ML 32, 834-835, 836-837.
- 80) Confessiones, XII, 31, n. 42; ML 32, 844.
- 81) De Genesi ad litteram imperfectus liber, 3, n. 9; ML 34, 223.
- 82) De Genesi ad litteram imperfectus liber は393年頃の作、Confessiones は400年頃の脱稿、De Genesi ad litteram は401-415年の作とされている。
- 83) De Genesi ad litteram, I, 3, n. 7; ML 34, 248-249.
- 84) Idem. IV, 21, n. 38; ML 34, 311.
- 85) Idem. I, 13, n. 27; ML 34, 256.
- 86) Idem. I, 15, n. 30; ML 34, 257.
- 87) Ibid.
- 88) De Genesi ad litteram imperfectus liber, 4, n. 13; ML 34, 225.
- 89) De Genesi ad litteram, I, 5, n. 11; ML 34, 250.
- 90) Ibid.
- 91) De Genesi ad litteram, VI, 13, n. 23; ML 34, 349.
- 92) De Genesi ad litteram, I, 15, n. 29; ML 34, 257.  
materia origine, non tempore formam praecedit.  
Amplius vide: De Genesi ad litteram, V, 5, n. 16; ML 34, 326 et idem VIII, 20 n. 39; ML 34, 388.
- 93) De Genesi ad litteram, I, 15, n. 29; ML 34, 257.  
Amplius vide: Confessiones, XII, 29, n. 40; ML 32, 842-843.
- 94) De Genesi ad litteram, I, 15, n. 29; ML 34, 257.
- 95) De civitate Dei, XI, 30; ML 41, 343.
- 96) De Genesi ad litteram, IV, 2, n. 2-5; ML 34, 296-298.
- 97) Idem, IV, 1, n. 3; ML 34, 297.
- 98) Idem, IV, 2, n. 6; ML 34, 298-299.
- 99) Idem, I, 3, n. 7; ML 34, 248.
- 100) Idem, II, 3, n. 7; ML 34, 263.

- 101) Idem, II, 11, n. 24; ML 34, 272.  
 102) Idem, II, 12, n. 25; ML 34, 273.  
 103) Idem, II, 13, n. 26; ML 34, 273.  
 104) Idem, III, 1, n. 1; ML 34, 279.  
 105) Idem, III, 11, n. 16; ML 34, 285.  
 106) Idem, III, 19, n. 29; ML 34, 291.  
 107) Idem, II, 8, n. 16; ML 34, 269.  
 108) Idem, II, 8, n. 16; ML 34, 269.  
 109) Idem, I, 3, n. 7; ML 34, 248-249.  
 110) Gen. I, 4. De civitate Dei, XI, 20; ML 41, 333.  
 111) De civitate Dei, XI, 20; ML 41, 333.  
 sola ibi lux placuit Conditori: tenebrae autem angelicae, etsi fuerant ordinandae, non tamen fuerant approbandae.  
 112) De corruptione et gratia X, n. 27; ML 44, 932.  
 113) De civitate Dei, XI, 13; ML 41, 328.  
 114) Idem, XI, 13; ML 41, 329.  
 115) Vide (111).  
 116) De corruptione et gratia, X, n. 27; ML 44, 932.  
 angeli quidam, quorum princeps est qui dicitur diabolus, per liberum arbitrium a Domino Deo refugae facti sunt. Refugientes tamen ejus bonitatem, qua beati fuerunt, non potuerunt ejus effugere iudicium, per quod miserimi effecti sunt.  
 117) De civitate Dei, XI, 19; ML 41, 333.  
 118) Idem, XI, 13; ML 41, 329.  
 119) Idem, VIII, n. 3; ML 41, 252.  
 120) Idem, XI, 17; ML 41, 332.  
 121) De baptismo contra Donatistas, IV, 9, n. 13; ML 43, 162.  
 122) De vera religione, 13, n. 26; ML 34, 133.  
 123) De Genesi contra Manichaeos, II, 17, n. 26; ML 34, 209.  
 diabolus solebat antequam cadaret, de sublimi veritate gaudere in qua non stetit.  
 124) Contra epistolam Manichaei, 25, n. 27; ML 42, 191.  
 discite, omnes naturas quas fecit Deus et condidit ..... a summis usque ad infimas, omnes bonas .....  
 125) De civitate Dei, XII, 9, n. 1; ML 41, 356.  
 126) De peccatorum meritis et remissione, II, 18, n. 30; ML 44, 169.  
 127) De civitate Dei, XII, 9, n. 2; ML 41, 357.  
 Summa Theologiae, I, q. 62, a. 3, Sed contra.  
 128) De civitate Dei, XIII, 9, n. 1; ML 41, 356.  
 129) De natura boni contra Manichaeos, 1; ML 42, 551.  
 Summum bonum quo superius non est, Deus est: ac per hoc incommutabile bonum est; ideo vere aeternum, et vere immortale. Caetera omnia bona non nisi ab illo sunt, sed non de illo. De illo enim quod est, hoc quod ipse est: ab illo autem quae facta sunt, non sunt quod ipse. Ac per hoc si solus ipse incommutabilis, omnia quae fecit, quia ex nihilo fecit, mutabilia sunt.  
 130) De civitate Dei, XII, 9, n. 1; ML 41, 356.  
 Eo sunt boni Angeli ab malorum angelorum societate discreti, quod hi in eadem voluntate bona manserunt, illi ab ea deficiendo mutati sunt, mala scilicet voluntate, hoc ipso quod a bona defecerunt.  
 131) Ibid.

- 132) De Genesi ad litteram, IX, 23, n. 30; ML 34, 441.
- 133) De natura boni contra Manichaeos, 1; ML 42, 551.  
Quia vero et justus est, ei quod de se genuit, ea quae de nihilo fecit, non aequavit.
- 134) Contra Julianum Pelagianum, I, 9, n. 42; ML 44, 670.  
quoniam a summo atque incommutabili bono et nihilo facta est, ut esset, quamvis mutabile, tamen bonum.
- 135) De vera religione, 18, n. 55; ML 34, 137.
- 136) De civitate Dei, XII, 1, n. 3; ML 41, 350.
- 137) De civitate Dei, XII, 3; ML 41, 351.
- 138) Isaia XIV, 13, 14; De Genesi ad litteram, XI, 24, n. 31; ML 34, 441.  
In coelum ascendam, super sidera coeli ponam thronum meum, sedebo in monte excelso super montes excelsos qui sunt ad aquilonem, ascendam super nubes, ero similis Altissimo.
- 139) De civitate Dei, XII, 3; ML 41, 351.
- 140) Idem, XIX, 13, n. 2; ML 41, 641.
- 141) Idem, XII, 3; ML 41, 351.
- 142) De Genesi ad litteram, VIII, 23, n. 44; ML 34, 390.
- 143) De civitate Dei, XII, 3; ML 41, 351.
- 144) De Genesi ad litteram, VIII, 23, n. 44; ML 34, 390.
- 145) Enarratio in Psalmum XC, n. 2; ML 37, 1150.
- 146) In B. Joannis Apocalypsim expositio, XVII; ML 35, 2447.
- 147) De civitate Dei, XX, 7, n. 2; ML 41, 668.
- 148) この語法のよい例は De civitate Dei, XIII, 24, n. 2; ML 41, 399. に見られる次のようなものである。「あの人は死んでいま罰を受けている。」という場合、「あの人」(totum) によって靈魂 (pars) を示しているのであり、「あの人はここに葬られている。」と言う場合、「あの人」(totum) によって身体 (pars) を示している。
- 149) De civitate Dei, XX, 7, n. 2; ML 41, 668.
- 150) De Genesi contra Manichaeos, I, 23, n. 35; ML 34, 190.
- 151) De civitate Dei, XXII, 30, n. 5; ML 41, 804.  
De Genesi contra Manichaeos, I, 23, n. 35-41; ML 34, 190-193.
- 152) De civitate Dei, XX, 7, n. 2; ML 41, 668.
- 153) Idem, XX, 8, n. 1; ML 41, 670.
- 154) Ibid.
- 155) De civitate Dei, XX, 8, n. 3; ML 41, 671.  
Haec autem alligatio diaboli non solum facta est, ex quo coepit Ecclesia praeter Judaeam terram in nationes alias aliasque dilatari; sed etiam nunc fit, et fiet usque ad terminum saeculi, quo solvendus est. Quia et nunc homines ab infidelitate, in qua ipse eos possidebat, convertuntur ad fidem, et usque in illum finem sine dubio convertentur.
- 156) S. Leonis Magni Epistola XV ad Turribium Asturicensem Episcopum.  
De Priscillianistarum erroribus (Scripta 21 Julii an. 447). Cap. VI; ML 54, 683.
- 157) De Genesi ad litteram, IV, 22, n. 39; ML 34, 312.
- 158) Gen. I, 5; De Genesi ad litteram liber imperfectus, 7, n. 28; ML 34, 231.
- 159) De Genesi ad litteram, IV, 22, n. 39; ML 34, 312.
- 160) Idem, II, 8, n. 17; ML 34, 269-270.